

教育長 様

校番 32 沼南 高等学校長
(全日制 課程)

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和3年度 実施報告書**

1 学校の教育目標等

(1) 教育目標

家庭と農業に関する専門学科を有する高校として、学科間連携と実習や体験的な学習を通して、「地域産業の発展に貢献する人材」を育成する。

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

育てたい生徒像は、自他を大切にし、社会人として必要な「対話力」を身に付け、地域と社会に貢献できる生徒である。育成を目指す資質・能力は「対話力」である。

(3) 学科等の特色

家政科、園芸デザイン科ともに、それぞれ県東部唯一の家庭および農業に関する学科である。

家政科は、豊かな感性、思いやりの心を大切に、生活関連分野のスペシャリストの育成を目指している。被服・食物類型と保育・福祉類型に分けた教育活動を展開している。被服・食物類型では、被服・食物の分野を体験的な学習を通して学び、確かな技術と生活をコーディネートできる生徒を目指している。家庭科技術検定三冠王（和服、洋服、食物調理1級）を目指している。保育・福祉類型では、保育・福祉の分野を体験的な学習を通して学び、福祉マインドを育み、地域社会へ貢献できる生徒を目指している。家庭科技術検定（保育2級）を目指している。両類型ともに日本語ワープロ検定、サービス接遇検定も受検している。

園芸デザイン科は4haの広大な農場を擁し、作物栽培の体験的な学習を通して「食料・農業・環境」に関わる知識と技術を学び、地域農業や地域社会に貢献できるスペシャリストの育成を目指している。園芸福祉類型では、草花の栽培からフラワーアレンジメント・ガーデニングおよび園芸福祉活動への活用について学び、草花を通して豊かな生活を提供する力を身に付けることを目標に、園芸技術類型では地域の基幹作物であるブドウの栽培を中心に、各種園芸作物の栽培に関する知識と技術を習得し、地域農業の課題解決に積極的に取り組む姿勢を身に付けることを目標にしている。日本農業技術検定、フラワー装飾技能士3級、危険物取扱者試験、日本語ワープロ検定、小型建設機械特別教育講習、アーク溶接特別教育講習などの資格取得を指導している。

2 研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

家庭に関する学科（家政科）と農業に関する学科（園芸デザイン科）の学習内容には、食分野等の関連性のある内容がある。これを活用し、共通課題を設定し生徒が共同で作業し学習に取り組むことを通して、課題解決に向け探究する能力と態度を育成する。学習成果物を継続的に蓄積し、ルーブリックによる評価等を行う。

対話力を高め、専門的な知識と技能を有する地域の人材を活用した教育内容を実践する。

(2) 3年後の目指す学校の姿

福山市域で唯一の家庭に関する学科及び農業に関する学科からなる専門高校として、地域産業や地域社会の発展に貢献することができる人材育成を目指す。実習等の体験的な学習をはじめとした職業人教育を通して、地域の産業界が必要とする社会人としてのコミュニケーション能力や主体的に取り組む態度等の資質・能力を身に付けさせることができるカリキュラムが構築されている。

専門高校としての強みを活かし、両学科が互いの学習成果物を活用するなど、学科間連携が推進されている。

地域と連携した体験活動や、地域の特産品や行事などの地域資源を活用した交流活動、本校生産物の販売活動などを通して、地域や社会との接続の機会をより一層充実させ、地域に根差した学校となっている。

(3) 令和3年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・ 総合的な探究の時間と各教科・科目との関連を示すカリキュラム・マップが作成されている。
- ・ 学校として育成を目指す「対話力」についてルーブリックを作成し、教員による評価及び生徒自身による自己評価に活用し、生徒の学習状況を適切に評価することができている。

イ アウトカム（成果目標）

- ・ ルーブリックによる「対話力」の評価結果が目標値以上である生徒の割合が50%以上になっている。
- ・ アンケートの結果、「対話力」が向上した生徒の割合が60%以上になっている。

(4) 令和3年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

家庭・家庭産業基礎（家政科）

総合的な探究の時間・沼南キャリア I（園芸デザイン科）

イ カリキュラム開発の概要

（マクロレベル）カリキュラム開発に先んじて、研究指定校の趣旨と取り組む内容の確認を行うとともに、学校経営計画の見直しを行った。具体的には現行の「学校目標」や「育てたい生徒像」の問題点・改善点を検討するとともに、改善が必要な問題や顕在化する場面を想定しながら生徒の現状を確認し、生徒の現状を踏まえて設定した育成すべき資質・能力、経営目標、育てたい生徒像、教育目標について再確認した。職員研修を通して全教員の意見を反映させながら、マスタールーブリックを作成した。事業の意義や内容を理解し、総合的な探究の時間の実施や評価、生徒の資質・能力の育成状況を評価するために、校内研修を6、8、11、12月に計4回行った。

（ミクロレベル）学校の教育目標や育成を目指す資質・能力の育成に向けて、家庭・家庭産業基礎（家政科）と総合的な探究の時間である沼南キャリア I（園芸デザイン科）を核として、生徒が各教科・科目等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活の中で総合的に活用できるようにするための対話力を育成するカリキュラムの開発を行った。

具体的には、本校の家政と農業の2つの専門学科である家政科と園芸デザイン科が連携し、野菜の栽培と加工について、相互に教えあうことを通して、生徒に生徒間のコミュニケーションのあり方について課題を見出させ、あるべきコミュニケーションの姿を考えさせ、その改善方法を考える中でよりよい対話力を身に付けさせることとした。9～12月に計10時間実施した。

カリキュラム開発に係って、教育目標である対話力の育成のための授業づくりを目指したカリキュラム開発という目的で、11月に指導助言者を招き研究授業と研究協議を実施した。

ウ 校内体制

既設のビジョン委員会（構成員（6名）：管理職、教務主任、進路指導主事、学科主任）を核として、事業を推進した。

カリキュラム開発を全教員が参画して行うため、職員会議で全体への周知を行うとともに、研修を行った。各教科・学科で取り組む内容について各教科会議で協議し、その内容を教科主任会議で報告し、それを踏まえてビジョン委員会を核にカリキュラム開発を進めた。生徒の学習状況の評価についても、必要に応じて各教科会議で検討した。

(5) 学習評価

今年度のカリキュラム開発の対象授業において、学校目標の「対話力」の評価を、聞く力、考える力、伝える力の3観点で、マスタールーブリックによる基準に従い1～4の尺度で評価した。自己評価が可能なチェックシートにできる形式にしており、今年度は生徒による自己評価のみを、単元の開始時と終了時に Google Workspace の Forms を使い実施した。

(6) カリキュラム評価

(マクロレベル) 教員の授業指導力向上のため、互見授業における授業評価において、今年度作成したマスタールーブリックを活用し、全教員の意識改革を促した。マスタールーブリックによる生徒評価の実施には至らなかったが、カリキュラム改善に向けた今後の活用の基礎づくりができた。

(ミクロレベル) 今年度は生徒による自己評価のみを、単元の開始時と終了時に実施した。対象となる授業は専門学科の特色を生かして、家政と農業の2つの専門学科である家政科と園芸デザイン科が連携し、野菜の栽培と加工について、相互に教えあうことを通して、対話力の向上を目指すものであった。

この単元の開始時に実施したアンケートでは、過半数の生徒が「交流授業により対話力の向上を意識することができる。」「人に説明することにより栽培や調理の理解が深まると思う。」と回答しており、また終了時のアンケートの自由記述では「相手に伝えることはとても難しく、伝える力は大切なことだと分かった。」「もっと相手が聞き取りやすいように言ったら良かった。」等の感想があった。このようなことから、生徒同士の授業での積極的な交流の必要性を感じ、対象となる授業において専門学科で学んだ内容を積極的に相手に教えるとともに、分からない点を積極的に相手から聞くように意識的に強く指導した。

そのほかの授業においても、対話力の向上を学校生活全般において意識できるようにするため、対象学年の全生徒にマスタールーブリックを配付するとともに、教室に掲示した。

3 令和3年度の成果及び課題

(1) 成果

学校として育成を目指す「対話力」についてマスタールーブリックを作成でき、生徒自身による自己評価に活用することができた。また、専門学科(家政科、園芸デザイン科(農業科))の特色を生かした学科間の交流学习を1学年で新たに実施でき、今後継続可能な学習計画を作成できた。

この単元の開始時と終了後に実施したアンケートの記述を分析したところ、人に説明することにより栽培や調理の理解が深まると思う、交流授業に積極的に参加することができた、専門科目(家庭科の科目や農業科の科目)を意欲的に学んでいる等の感想を示した生徒が過半数を占めた。自由記述の感想には、「もっと相手が聞き取りやすいように言ったら良かった。」「相手に伝えることはとても難しく伝える力は大切なことだと分かった。」等の記述があったことから、対話力の重要性を意識させることができたと考えられる。

また対話力の向上について、この単元の開始時と終了後に実施した自己評価を分析したところ、終了時の自己評価は「対話力」に関わる3つの力の自己評価は聞く力58%、考える力45%、説明する力48%で平均51%であった。聞く力や考える力は高く一定の成果があったと考えられる。

(2) 課題

専門学科(家政科、園芸デザイン科(農業科))の特色を生かした学科間の交流学习の効果向上のため、より高度な対話力を目指し、教員から生徒への働きかけや生徒同士が互いに教え合う内容を具体化する。またマスタールーブリックの活用の仕方を、チェックシート、掲示、振り返りなどの方法で工夫する。課題発見・解決学習につながる内容を計画的に盛り込む。

この単元の開始時と終了後に実施したアンケートの記述を分析したところ、人の話を理解するのが得意である、人に説明することが好きあるいは得意である等の感想を示した生徒が半数以下で、自由記述の感想には、「話し合いは難しかった。」「もっとうまく連携を取っていただければ当日まで準備が掛らなかったかもしれないです。」等の感想があったことから、円滑な対話の実施や対話力の向上には十分な準備をさせることが課題である。

また対話力の向上について、この単元の開始時と終了後に実施した自己評価を分析したところ、「対話力」に関わる3つの力の自己評価は聞く力58%、考える力45%、説明する力48%であった。考える力を弱いと感じている生徒が多く、そのための方策が必要である。

4 令和4年度の目標及び取組内容

(1) 令和4年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

総合的な探究の時間と各教科・科目との関連を示すカリキュラム・マップが作成されている。

学校として育成を目指す「対話力」についてルーブリックを作成し、教員による評価及び生徒自身による自己評価に活用し、生徒の学習状況を適切に評価することができている。

イ アウトカム（成果目標）

ルーブリックによる「対話力」の評価結果が目標値以上である生徒の割合が60%以上になっている。

アンケートの結果、「対話力」が向上した生徒の割合が60%以上になっている。

(2) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラム開発の概要

総合的な探究の時間を核として、生徒が各教科・科目等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活の中で総合的に活用できるようにするための対話力を育成するカリキュラムの開発を行う。

具体的には、本校の家政と農業の2つの専門学科である家政科と園芸デザイン科が連携し、野菜の栽培と加工について、相互に教えあうことを通して、生徒に生徒間のコミュニケーションのあり方について課題を見出させ、あるべきコミュニケーションの姿を考えさせ、その改善方法を考える中でよりよい対話力を身に付けさせる。

事業の意義や内容を理解し、生徒の資質・能力の育成状況を評価するために、校内研修を年4回程度行う。

イ 校内体制

ビジョン委員会（構成員（6名）：管理職、教務主任、進路指導主事、学科主任）を核として、事業を推進する。

カリキュラム開発を全教員が参画して行うため、職員会議で全体への周知を行うとともに、研修を行う。

各教科・学科で取り組む内容について各教科会議で協議し、その内容を教科主任会議で報告し、それを踏まえてビジョン委員会を核にカリキュラム開発を進める。

生徒の学習状況の評価についても、必要に応じて各教科会議で検討する。